

Б. П. Полевой の間宮林蔵批判について⁽¹⁾

高 野 明

[は じ め に]

ВГО (Всесоюзное Географическое общество) 所属の Б. П. Полевой は、1958年以降、サハリンおよび17～19世紀における極東地域のロシア人の活動について諸論文を発表している。⁽²⁾ 実証的で精緻な業績が多く、注目すべき研究者のひとりであるが、とくに1968年に、科学アカデミア地理学協会東洋委員会編集の論文集『東洋の諸国と諸民族』第6分冊に発表した論攷「タタール海峡発見の歴史に寄せて」—— К истории открытия Татарского пролива. 《АН СССР. ГОСССР. Восточная Комиссия. — Страны и народы Востока.》 вып. VI, М., 1968, стр. 68—85. は、原文18頁、脚注90項目の野心的な労作である。ポレヴォーイは、この論文において、1808～1809年（文化5～6年）における松田伝十郎・間宮林蔵のサハリン探検と、1849年（嘉永2年）の海軍士官 Геннадий Иванович Невельской による海峡発見に論及し、その歴史的意義を認めながらも、ロシア人はすでに17世紀にサハリンが独立した島であることを知っていたし、海峡の存在も認知していたから、従って、間宮林蔵が最初の海峡発見者であり、また、ネヴェリスコイがロシア人として最初の海峡発見者であるという定説は成立しないとの結論に達している。ポレヴォーイは、幾多の史実を列挙して、間宮林蔵の発見が先駆的意義をもつものであることを否定しているが、その方法論には疑義があるので、あえて問題提起を行ない、識者の判断に委ねたいと考える次第である。

1. ポレヴォーイの反論の展開

タタール海峡とは、現在ソ連領のサハリン島西岸におよぶ広汎な海峡の呼称であって、いわゆるネヴェリスコイ海峡（間宮海峡）をふくむ地理的名称である。日本の文献では、タタール海峡すなわち間宮海峡とみなす説があるが、事実上は別々に存在している。ポレヴォーイが、「ネヴェリスコイ海峡」⁽³⁾ とはい

わずに、「タタール海峡」という広い地域にわたる地名を冒頭に掲げている意図は、17～18世紀におけるロシア人の幅広い活動の舞台を設定して、その先駆的意義を定着したいという発想にもとづくのではないだろうか？

ポレヴォーイ論文の反論の方法についてのべる前に、周知のことながら間宮海峡の名が広く世界に知られるようになった動機について確認しておきたい。間宮林蔵の詳細な伝記を執筆された洞富雄博士の言葉を借りるならば、「間宮海峡——これは、外国人が描いた世界地図の上に、日本人がその発見者として示されているただひとつの地点の名である。」^[4] すなわち、1809年（文化6年5月12日）に間宮林蔵の踏査によって、樺太が離島として確認され、その実測地図が作成された。この林蔵の地図にもとづいて、幕府天文方の高橋作左衛門（景保）が同年に作図した『日本辺界要図』のコピーが、後年ドイツの高名な医師・植物学者・日本研究者ジーボルト（オランダ語の発音でシーボルト）Philipp Franz von Siebold, 1796—1866. によって、大著『日本』Nippon. Archiv zur Beschreibung von Japan und dessen Neben- und Schutzländern Jezo mit den südlichen Kurilen, Sachalin, Korea und den Liukiu Inseln. Leiden, 1832—52. の第1分冊に翻訳図として掲載され、str. Mamia (seto) 1808. と記録されたのである。^[5] しかし、ポレヴォーイは、これらの史実を興味ある事実と認めながらも、間宮海峡が、林蔵による最初の発見であるということは、絶対に認めないと強調して反論の口火を切っている。ポレヴォーイは、反証の根拠として、まず東洋学者 Димитрий М. Позднеев の代表的著述『日露関係北日本史料』Материалы по истории северной Японии и ее отношений к материку Азии. Т. 2, Июкохама, 1909. ならびに、ドイツの地図作成史家 L. S. Bagrow の論文「アムール河、タタール海峡およびサハリン島発見の先鞭」——Die Priorität der Entdeckung der Amur, des Tatarischen Golfs und Insel Sachalin. 《Yamato; Zeitschrift der deutsch-japanischen Gesellschaft. Heft 2—3, Berlin, 1931. を引用している。すなわち、ボズドネーエフ教授は、タタール海峡の存在は、間宮林蔵の探検以前に地理学者たちに知られていたはずであり、これを立証する十分に必要な資料を再検討すべきであると研究者たちにアピールした、とのべている。さらに、バグロウの論文では、すでに17世紀においてタタール海峡の存在がロシア人によって知られている以上、その発見を19世紀とみなすことは不可能であると指摘しているとのべ、つぎのような史実を列挙している。（便宜上、編年誌的に要約してみた。一筆者）

1. サハリンにおける考古学的調査によって、サハリンの文化とアムール沿岸の文化との間には、古代から密接な関係が存在したことが、Р. В. Козырева その他の研究によって明白である。^[6]
 従って、タタール海峡沿岸の諸地域（Погоби, Виахту, Танги, Мгача, Дуи その他）には、アムール河下流の諸民族（нивхи, нанай, даур, эвенки その他）が居住して、サハリン島と海峡の存在を知っていたことは疑念の余地がない。
 А. Ф. Миддендорф の旅行記によれば、オホーツク沿岸のエヴェンキ族は、サハリン島を《Остров Янкур》と呼んでいた。^[7]
2. ロシヤ人として最初にアムール河口に達した Иван Юрьевич Москвитин の遠征メンバーは、1640年にエヴェン族（эвен）から河口付近に「ギリヤーク汗の島々」《Острова гилытцкой орды》が存在する情報を聞知している。これらの島々の中で最大のサハリン島は、《гилыт》と呼ばれていた。^[8] オホーツク沿岸のエヴェンキ族も、サハリンが島であり、海峡の存在を知っていた。同じく1640年に、モスクヴィーチン一行は、長さ8サージェンの皮舟でアムール河口に達し、「鬚の濃い人びと」——南サハリンのアイヌ——の存在を知った。彼らは、交易のために舟でオムール（アムール）河へやってくるのが判明しているので、当然タタール海峡の存在は、アムール河沿岸の住民たちに知られていたはずである。^[9]
3. 1642年、レナ河地方出身の地図作成者 Курбат Иванов 作成の地図には、モスクヴィーチンの仲間 Дмитрий Копылов らのレナ、バイカル、オホーツク沿岸の調査の成果が反映している。また17世紀50年代にも、アムール地方のコサックたちによって同様の地図が作成され、すでにサハリン島と海峡の存在を知っていたことを証明している。また、1645年11月9日、Василий Данилович Поярков の遠征隊も、ヤクーツクでサハリン島の情報を入手し、「アムール河口の入江に島があり、この島には24の部落があり、ギリヤークや、ユルト（юрт）が、50人乃至100人ずつ居住している」^[10]と記録している。「アムール河口からギリヤーク人の島まで完全に結氷する」^[11]ともっている。ロシヤのコサックたちは、南サハリンのアイヌ人のことを《куе》^[12]と呼んでいた。
4. 1652年には、ポヤルコーフの支隊 Иван Нагиба の一行がアムール河下流

に滞在していた頃、彼らは始めて《Иессо》(蝦夷)島沿岸に《чижем》(日本人)¹⁴³が存在することを知った。これは、タタール海峡を航海した《нивх》(ギリヤーク人の古称)から得た情報と考えられる。

5. 1655～56年、タタール海峡沿岸で越冬したロシア人、Онуфрий Степанов Кузнец, Федор Пушин, Петр Бекетов ら600人は、Таунский, Дутмытский, Чагаданский, Маганзясский などの部落を歴訪した。Б. О. Долгих の論文によれば、Таунский とは現在のギリヤーク部落《Танги》, Дутмытский とは、サハリン島の Дуэ (ドゥエ) である。従って、ロシア人が、タタール海峡の最狭部を知っていたことは明白である。¹⁴⁴
6. 以上のほかに、1670年代の有名な Николай Гаврилович Спафарий の手記『大河アムールの物語《Сказание о великой реке Амуре.》や、С. Де-Ливрон の《Лоция северо-западной части Восточного океана.》ч. 1, СПб., 1901. などによっても、17世紀におけるロシア人のタタール海峡に関する知見を証明することができる。

2. 日本・中国におけるカラフト島

ポレヴォーイは、上述のような史実にもとづいて、17世紀におけるロシア人の活動によって、サハリン島と海峡の存在は十分に確認されたと論述し、Семен Ульянович Ремезов, 1642—после 1720. の地図帖¹⁴⁵や、N. C. Witsen (H. K. Витсен) の地図 (1687)¹⁴⁶にもサハリンが島として記録されていると力説している。たしかに、ロシア人たちがサハリン島について知っていたは否定しないが、しかし、ポレヴォーイのような論法でいえば、日本人や中国人も、同様にカラフト島をずっと昔から知っていたわけである。中国人について言えば、すでに唐代の貞観14年(西暦640)に王子可也余志(可也余莫)を使節として唐に朝貢した流鬼国は、白鳥庫吉博士の考証によれば、ギリヤーク人が樺太のアイヌ人を呼称した Laer-kuye,あるいは Laer-kughi の音訳と考えられている。サハリン島(樺太)は、唐太, 唐子とも書かれており、唐代の影響を無視するわけにはいかない。¹⁴⁷日本人について言えば、『松前志』(天明元年序・1781)の記録に、松前領主蠣崎公広は、寛永12年(1635)に家臣佐藤嘉茂左衛門と蠣崎蔵人を樺太島めぐりに派遣したことが見える。両人は、ウッシャム(白主付近)に渡っただけといわれるが、翌年さらに派遣された甲道庄左衛門

は、ウッシャムで越冬し、翌春タライカ湖畔に至ったとされている。¹⁸⁸ また、正保元年（1644）に、松前藩が幕府に提出した『正保御国絵図』には、はじめて「からと島」として独立した島が描かれ、その後元禄13年（1700）提出の『元禄御国絵図』にも、「からと島」および21カ所の地名が記入されている。¹⁸⁹ しかし、わずかに北緯50度ぐらいまでしか達しなかったと推察されるこれらの「絵図」がはたして「地図」といえるかどうかは別問題であり、地名の多くもアイヌ人などからの聞き書きであろうとおもわれる。しかも、これらの絵図は幕府の掌中であって、外国人にも日本国内にも知られていなかったはずであるから17世紀から18世紀にかけての日本人の樺太にたいする認識は、きわめて稀薄であったであろう。ポレヴォーイの論文では、考古学上の発掘品を引合いに出しているが、アムール沿岸やサハリン島の原住民たちが、独立した島であることを知っていたのは当然であり、こうした論法でいえば、いかなる地理発見史も成立するはずはない。従って、ロシアのコサックたちが、たとえ幾度かの遠征によってサハリン島の存在を知っていたとしても、その史実が広く内外に客観的事実として通用し、認識されていなかったならば、それはやはり「限られた冒険者の知見」にすぎず、真理として定着していたとは断定できない。筆者は、ロシア人の活動が世界地理発見史上に果たした偉大な実績を認めるのにやぶさかではないが、間宮林蔵やネヴェリスコイの探検も、それぞれの時代において、各々の国家の科学的発展に画期的な貢献をもたらした発見として独立した意義があると考えざるをえないのである。

周知のように、オランダ東インド会社の航海士 Maerten Gerritsen de Vries と Hendrick Corneliez Schaep による1643年の金銀島探検は、濃霧のためエトロフ・ウルップ両島を誤認して、State Land, Compagnies Land と命名し、北方海域における知識の混乱をもたらした。しかし、ド・フリースの報告書によって北緯40～50度付近の南千島付近は、はじめてヨーロッパの関心を集めるに至った。¹⁹⁰ 既述のウィトゼンの地図にも、ド・フリースの影響によって、Terre de la Compagnie, Isle des Etats 両島が描かれている。

一方、中国においては、清の康熙48年（1709）に、康熙帝の命によってフランス人耶蘇会士 Régis, Jartoux, Fridelli らが黒竜江口に至り、河口の海中にサハリヤン・ウラ・アンガ・ハタ（黒竜江口峯）と呼ばれる島の存在を原住民から聞いたが、実測は行なわないままに、北緯50度近辺に離島を描いたとされている。サハリンの語源は明白ではないが、一説には、黒竜江を意味する満洲（肅慎）語の「サガリンウラ」に由来するといわれる。¹⁹¹ いずれにせよ、

Sakhalin (英), Sakhaline (仏), Sachalin (独), Сахалин (露) 以外にも, Sahalien, Saghalien, Sagalien, Sachalien, Saghalin などさまざまな表記が泰西の書・地図に残されている。フランスの地理学者 M. D'Anville は、前述のフランス人耶蘇会士から送られた地図を基として、多くの中国・韃靼国を作成しているが、J. B. Du Halde の『中国誌』—— Description géographique, historique, chronologique, politique et physique de l'Empire de la Chine et de la Tartarie Chinoise. Paris, 1735. 所収の地図 (1732) には、樺太島が「く」の字形に描かれ、SAGHALIEN ANGA HATA と記録されている。しかし、JESOGASIMA (北海道) とサハリン島との間に大きな TERRE..... D'ESO (蝦夷大陸) が描かれていて、デ・フリースの影響によるものとおもわれるが、離島として描かれている点に進歩が見られる。このダンヴィユの地図は、1752年版 (Teleki 版) では、上記の TERRE D'ESO が消えて、サハリン島の名も、SAHALIEN-ULA HATA と変って記入されている。²³ なお、ポレヴォーイは、フランス人耶蘇会士の探検によるサハリン島の地図の影響が1745年の Академический атлас Российской империи に明白に見られることを認めている。²⁴ このことは、18世紀半ばにおいても、ロシア人が、ヨーロッパの地図に依存していた事実を示し、それ以前のロシア人の活動も、地理学史上においては、まだ決定的な役割を果たしえなかったことを物語っている。Иван Кирилов の Карта России (1733) にも、依然としてドフリースや、ダンヴィユの地図の影響が認められる。²⁴

3. 仏・英・露の三大航海士のサハリン探検と間宮林蔵による海峡発見

18世紀末から19世紀初頭にかけて行なわれた、J. F. G. de la Pérouse, William R. Broughton, Иван Федорович Крузенштерн の三大航海士のサハリン沿岸探検が、従来は単純素朴に島と考えられていたサハリンを半島としてみなす結果を招来したことは周知の通りであるが、その経緯を簡単にのべておきたい。

まず、フランスのラ・ペルーズは、1786年に国王ルイ16世の命によって世界周航の途についた。翌年、黄海から日本海に入ったラ・ペルーズは、タタール沿岸を北上してサハリン対岸に達し、大陸とサハリン西岸を望む地点まで北進したが、水深が浅くなり潮流も認めなかったため、ついに海峡を発見せず、宗谷海峡からオホーツク海へ抜けてしまった。しかし、彼は、サハリンが半島で

あると断定したわけではなく、海峡があるかも知れないと考えていたのである。その後10年を経て、1797年に、今度はイギリスのブロートンが、津軽海峡から日本海へ出て北上し、サハリン西岸に向かった。彼は、ラ・ペルーズが達したブーチン岬よりもさらに8マイルほど北の北緯51度45分7秒まで進んだが、やはり海水の風いだ湾を発見してチャップ湾と名づけ、その奥部を調査せずに引返し、沿海州を南に下って香港へ帰航した。19世紀初頭の1804年、ロシアの最初の世界周航を敢行したエストニヤ生まれの海軍士官クルーゼンシュテルンは、第2回遣日使節の Николай Петрович Резанов と仙台石巻出身漂流民津太夫一行を乗せて長崎に入港した。しかし、漂流民を送還して日本と通商条約を締結しようとしたレザーノフの夢は無残にも破れ果て、痛憤やる方のないレザーノフは、ついに腹心の部下 Николай Александрович Хвостов 大尉と、Гаврил Иванович Давыдов 少尉をそそのかして、文化3年(1806)にサハリン南岸アエワ湾の日本人部落を急襲させたのである。さらに、翌1807年にも、エトロフ島、礼文島、利尻島の各地で暴挙をはたらき、いわゆるフヴォストフ事件(蝦夷地乱妨・丁卯の変)を惹きおこした。これが契機となって幕府の北方警備が強化され、文化5年から6年にかけての松田伝十郎、間宮林蔵の樺太探検が行なわれたわけである。²⁴ クルーゼンシュテルン自身は、レザーノフの対日報復には全く無関係であったが、世界周航の壮挙をめざしてサハリン東岸を北上し、サハリン最北端を回航して南下し、1805年に間宮海峡の北端にあたるゴロヴァチェフ岬と大陸側のロンベルグ岬との間に到達した。しかし、水深の関係から本船では航行不可能となり、ロンベルグ大尉にボートで探索させたが、それも十分には完遂できないまま、海水でなくて淡水が存在したことを確認して引返してしまった。²⁵ クルーゼンシュテルンは、黒竜江河口の清国警備艇との紛争を警戒してカムチャツカへ帰航したが、その後広東でブロートンの航海記を読み、いよいよカラフト半島説に自信を抱くようになった。ポレヴォーイも、この間の経緯にふれてロシアにおいてカラフトが半島として描かれるようになったのは、クルーゼンシュテルンの航海以後のことであるとのべている。²⁶

こうした地理学上の混乱は、当然日本にも波及した。すでに1792年(寛政4年)に伊勢国漂流民大黒屋光太夫を護送して根室に来航した第1回遣日使節 Адам Кириллович Лаксман によって鎖国の扉を叩かれて以降、幕閣はもとより、日本思想界にも動揺の兆が見えてきたのである。蘭学者桂川甫周は、伊勢漂流民の口述にもとづく『北槎聞略』を編み、また同じく蘭学者大槻玄沢も

志村弘強とともに仙台漂流民の見聞を基に『環海異聞』を著わして強豪ロシアの形勢を上申した。長崎一港主義でオランダと交易しているだけではもはやまされない世界史の転換期にさしかかっていたのである。ヨーロッパではフランス革命の火の手が上り、英・米の産業資本主義の嵐は、太平洋の波濤を越えてアジアを席捲しようと迫りつつあった。従来東アジアに支配的な力を揮っていたオランダ東インド会社に代わって、ロシアもアラスカに本拠を構えた露領アメリカ会社を拡張して中国・日本をふくむ太平洋一円に市場を開発して、大陸中継の不便なキャフタ貿易による経済的打撃を打開しようと苦慮していた。工藤平助の『赤蝦夷風説考』、林子平の『三国通覧図説』（三国とは、朝鮮・琉球・蝦夷）、『海国兵談』、桂川甫周の『魯西亜志』などの諸書が18世紀末に相ついで上梓されたのは当時の日本の危機感が背景となっていることはいうまでもない。とりわけ、ロシアに対する北門の急は、ここにすぐれた測地家の登場を要請する必要に迫られ、幕府は蝦夷地の検分を当時弱冠23才の天文方の高橋景保に命じた。景保は泰西の文献や地図を調べてみて樺太が中国大陆と陸続きかどうか依然として不明であることを強く意識した。林子平や近藤重蔵の地図には、カラフト半島の北方に別のサガリン島が描かれていて、近藤重蔵は、「蛮国ニアモル（アムール）ノ川口ニサガリン島アリ。或人云、サガリンハカラフト地ノ内ノ小名ナルベシト。以守重（重蔵）考之ニ、此説非也、サガリンハ自ラ別島也。」⁹⁴と書いている。（傍線・注は筆者）高橋景保は、文化5年（1808）の春、樺太探検を幕府に申請し、幕命により間宮林蔵と松田伝十郎の両名が実施することになった。幕府は、天明5年（1785）に大石逸平を、寛政2年（1790）に最上徳内を南千島、樺太へ派遣し、さらに享和元年（1801）に中村小市郎と高橋次太夫を樺太へ派遣しているが、やはり根本的解決には至っていなかった。林蔵の一行は、文化5年4月にアイヌ土人の独木舟でシラヌシを出発して東岸の北知床岬まで進み、陸路西岸のクシュンナイに行き6月にノテトで松田伝十郎の一行に会っている。彼らは北緯51度50分のナツコまで進み、はじめてサガリンと樺太とが同一の島であるという予想を立てることができた。翌文化6年1月、林蔵は単身でトンナイを出発し、クルーゼンシュテルンも未踏の100マイルの沿岸を測量しつつ、ついに水道の北端ナニヤーに達し、はじめて地峡ではなくて海峡であることを確認した。林蔵は、さらに対岸の中国大陆に渡り、黒竜江下流の山靉地域を踏査し、有名な『東韃地方紀行』（文化8年）ならびに『北蝦夷図説』（安政4年初刊）の名著を後世に伝えたのである。この間の詳細は、洞富雄博士の『樺太史研究』（改訂新版『北方領土の歴史と

将来』新樹社・昭和48)および『間宮林蔵』(人物叢書)を参照していただきたい。

〔む す び〕

以上、きわめて概略ではあるが、ポレヴォーイの論旨を紹介しつつ、筆者としての間宮林蔵の再評価を行なったつもりである。しかし、間宮海峡発見の歴史的背景を考えると、深い国際環境が介在しているのであり、単なる英雄のロマンではないことが理解されるであろう。問題は、一日本人の壮挙にあるのではなく、19世紀における世界史の変遷につらなる重要なプロセスとしてとらえなければならないと考える。鳥居竜蔵博士は、名著『人類学及人種学上より見たる北東亜細亜』(岡書院・大正13)の巻末に1854～1855年に行なわれたЛеопольд Иванович Шренк と Ричард Карлович Маак のアムール河流域の大探検の際に、彼らが間宮林蔵の書いたテキスト(露西亞帝国地理学協会誌に訳載されたジーボルトの紹介)を用いたことを指摘している。このことによっても明白なように、学術研究の発展は、相互の正しい評価と認識に立脚してはじめて可能なものであり、個人の実績を狭小なナショナリズムによって否定すべきものではないように筆者は思う次第である。

注(1) 本稿は、昭和46年10月29日、1971年度日本ロシア文学会 研究発表会(於早稲田大学)で報告した内容を補訂したものである。

(2) Борис Петрович Полевой の主な業績は、つぎの通りである。Забытые сведения спутников В.Д. Пояркова о Сахалине (1644—1645 гг.) 《Известия ВГО》 вып. 6, 1958.; Первые сообщения сибирских казаков о японцах (1652—1653 гг.) 《Вопросы истории》 № 12, 1958.; Первооткрыватели Сахалина. Южно-Сахалинск, 1959.; Курбат Иванов—первый картограф Лены, Байкала и Охотского побережья (1640—1645 гг.) 《Известия ВГО》 вып. 1, 1960.; Новое о Г.И. Невельском. 《АН СССР. ГОСССР. Путешествия и географические открытия в XV—XIX вв.》 М.-Л., 1965.; Из истории открытия северо-западной части Америки. 《От Аляски до Огненной земли.》 М., 1967. なお、ポレヴォーイの父、地質学者で鉱山技師の Петр Игнатьевич Полевой (1873—1938) は、サハリンの石油・石炭の開発に貢献した人物で、1918年3月には、北海道の美唄、夕張炭坑、九州の三池炭坑を視察して助言を与えている。ポレヴォーイが、サハリンの歴史に興味を持った契機のひとつとして父の影響を考えることができる。詳細は、Он любил Сахалин всей душой. 《Исследователи Сахалина и Курил; сборник статей.》 Южносахалинск, 1961, стр. 81—107. を参照。

- (3) 日本の地名辞典や百科事典の記述にも混乱が見られる。間宮海峡が存在しない限り、タタール海峡そのものが成立しないことは確かだが、すでに現在では、ネヴェリスコイ海峡と、それを包括してサハリン西岸南部におよぶタタール海峡とは別箇の地名として掲示されている。Атлас Сахалинской области. М., 1967. 参照。
- (4) 洞富雄『間宮林蔵』（人物叢書44・吉川弘文館・昭和35）1頁。
- (5) 間宮海峡の発見年は、正確に言えば、間宮林蔵と松田伝十郎の第一回探検の文化5年、すなわち1808年ではなくて、第二回探検の1809年である。しかし、第一回探検の際に北緯51度50分のラッカまで北進して、「からふと離島に相違ある間敷」と最初に推測したのは松田伝十郎である。伝十郎は、100マイルにわたる海峡を踏査していないので、やはり事実上の発見者は間宮林蔵であり、発見年次は1809年とすべきである。洞、前掲書、2～3頁。また、ジーボルトは、間宮林蔵について「5月7日〔1826年旧4月9日〕夜、中津侯来訪。贈物として鷹狩の道具をうける。天文学者グロビウスこと、高橋作左衛門が蝦夷・樺太のすばらしい地図を私に見せた。サンガル海峡（Sangar）を津軽海峡（Tsugar）と呼んでいる。樺太とアムール河の河口の間は間宮の瀬戸（Mamijanoseito）という。私は彼（グロビウス）を通じ、この群島についての地理学的著作、すなわち山丹（Santang）旅行に関する日本人、間宮林蔵の日記・カラフトの記述をもらう約束をとりかわす。天文方の多くの人たちが今日公式に訪問する。」と書きとめている。ジーボルト著・斉藤信訳『江戸参府紀行』（東洋文庫87・平凡社・昭和42）218頁。なお、ジーボルトの露訳本は、Зибольд, Ф. Путешествие по Японии, или описание японской империи в физическом, географическом и историческом отношениях, дополненное сведениями и известиями из Кемпфера, Фишера, Дефа, Шарьвуа, гр. Гогендорна, Крузенштерна, Тунберга, Титсинга, Верениуса и др. Пер. В. М. Строева. СПб., А. А. Плюшар, 1854. 3 тт. (早大図書館蔵) がある。ポレヴォーイは、本書についてはふれていない。
- (6) Козырева, Р. В. Древнейшее прошлое Сахалина. Южно-Сахалинск, 1960.; Древний Сахалин. Л., 1967.
- (7) Миддендорф, А. Ф. Путешествие на север и восток Сибири. ч. 1, отд. 1, СПб., 1860.
- (8) Полевой. Доходил ли Иван Москвитин до устья Амура? 《Материалы отделения истории географических знаний ГОСССР.》 вып. 1, Л., 1962.
- (9) Полевой. Новый документ о первом русском походе на Тихий океан. 《Труды Томского областного краеведческого музея.》 т. VI, вып. 2, 1963.
- (10) ЦГАДА (Центральный государственный архив древних актов. Фонд Якутской приказной избы. Оп. 1. стр. 43.
- (11) ЦГАДА. Там-же.
- (12) Куде (Куй) は、Куде・Куй・Коеとも発音され、庫葉・庫負・庫野・苦夷・苦元などの文字で明代以後の中国の文献に記録されている。いずれもギリヤーク語に由来するといわれ、アイヌ人のことである。唐代には、アイヌはカラフト島の北部

- だけでなく、海を渡ってアムール河口にも居住していたと考えられる。洞富雄『樺太史研究——唐太と山丹』（新樹社・昭和31）81～82頁。西鶴定嘉『樺太史の榮』（樺太叢書6・樺太庁・昭和16）13頁。
- (13) Чижем は, Sisam, ギリヤーク語で日本人の呼称と考えられる。『吉林通志』（清代）には、「西山国」と見え、日本国の呼称であった。吉田東伍著『増補大日本地名辞書』（富山房・昭和45）第8巻, 409頁。
- (14) Долгих, Б. О. Этнический состав и расселение народов Амура в XVII в. по русским источникам. 《АН СССР. Сборник статей по истории Дальнего Востока.》 М., 1958.
- (15) Ремезов に関する詳細な研究は, Гольденберг, Л. А. Семен Ульянович Ремезов; Сибирский картограф и географ. М., 1965 を参照。ポレヴォーイは, 《Служебная чертежная книга》(1702～1730) 収録の1667年のシベリヤ地図を引用している。しかし, Атлас географических открытий в Сибири и в северо-западной Америке, XVII—XVIII в. в.; Под ред. А. В. Ефимова, М., 1964. 所収の第28図《Чертеж Сибири, 1667 г.》(так называемый ГОДУНОВСКИЙ) には, Амур, Восток の地名は見えても, サハリン島と海峡が示されていると判断することは不可能である。
- (16) Witsen, N. C. Noord en Oost Tartaryen. Amsterdam, 1705; Golder, F. A., Russian Expansion on the Pacific, 1641—1850, Cleveland, 1914. (Reprint ed.: Gloucester, Mass., Peter Smith, 1960.) pp. 257—258. ウィットゼンの地図には, アムール河口に面して大きな Amoerse Eylandt (アムール島) が描かれ, その北側には, 小さい Stolpka Memcoy (Golder によれば, Stone Column) という別の島が示されている。ポレヴォーイは, アムール島は, すなわちサハリン島であるとしているが, ウィットゼンの1679年の地図 (С. И. Новаковский. Япония и Россия. ч. 1, Токио, 1918, стр. 41) では, 蝦夷大陸 (Terre de Jedso) 全体が半島の形で示されていて, アムール河口にわずかに上記の2島が描かれ, 少なくともロシア人の情報によってサハリン島が描かれた証拠は認められない。なお, ウィットゼンの前掲書は, 文化6年 (1809) に, 馬場佐十郎 (貞由) によって訳された『東北韃靼諸国図誌野作雑記訳説』として知られている。洞, 前掲書, 144頁。大槻如電原著・佐藤栄七増訂『日本洋学編年史』（錦正社・昭和40）343頁。
- (17) 白島庫吉「唐時代の樺太島に就いて」12. 流鬼国名義の事。(歴史地理・10巻4号)。洞, 前掲書, 81頁。吉田, 前掲書, 411頁。
- (18) 北海道総務部行政資料室編『樺太基本年表』（昭和46）10頁。寛永12年の島めぐりは, 本書によれば, 村上掃部左衛門となっている。西鶴, 前掲書, 24頁。洞, 前掲書17頁。
- (19) 『樺太基本年表』10, 16頁。西鶴, 前掲書, 24～25頁。洞, 前掲書, 22頁。元禄絵図に示された地名の詳細は, 吉田, 前掲書, 407頁「唐人島」の項を参照。
- (20) Reize van Maarten Gerritsz de Vries in 1643 naar het noorden en costen van Japan, volgens het “Journaal gehouden door C. J. Coen op het schip

“Castricum” Amsterdam, 1858. 銅板彩色・50.5×60 cm. 市立函館図書館蔵。

- (21) 吉田, 前掲書, 412頁「薩哈連島」の項を参照。ロシア人は, 1689年の清国とのネルチンスク条約によって, 黒龍江方面への進出を阻止され, 通商植民政策の方向をカムチャッカ開発に転じた。ロシア人は, サハリン探検からクリール(千島)列島探検に進出することによってさらに広汎な北太平洋, オホーツク海制圧をめざして拍車をかけた。高野明『日本とロシア——両国交渉の源流』(紀伊国屋新書B—47・昭和46) 19~20頁。
- (22) 洞, 前掲書, 24~25頁。松本賢一編『欧洲古版日本地図集』(十一組出版部・昭和18) 65~67頁。
- (23) Полевой. К истории открытия Татарского пролива. стр. 73.
- (24) Атлас географических открытий в Сибири и в северо-западной Америке XVII—XVIII в. в., Карта № 72.
- (25) 洞, 前掲書, 36~40頁。高野, 前掲書, 155~163頁。
- (26) 羽仁五郎訳注『クルーゼンシュテルン日本紀行』下巻(興国叢書・駿南社・昭和6) 66~107頁。
- (27) Полевой. Там-же, стр. 75. Полево́йは, あまり知られていないロシアの1790年代のМантейфельの地図(刊行は1806~1807年)には, 《Остров Чока или Сагалиен》, 《Татарский рукав》が描かれていると述べている。
- (28) 近藤重蔵『辺要分界図考』卷之二(近藤正斉全集・国書刊行会・明治38)第一所収, 10頁。重蔵の「今所考定分界之図」は1804年のものである。また, 林子平の蝦夷図は, 1785年の作図で『三国通覧図説』所収。
- ・ 鳥居龍蔵「間宮林蔵氏と樺太及び東韃地方との関係に就て」(人類学及人種学上より見たる北東亜細亜・岡書院・大正13) 475—501頁参照。リチャード・マークの探検については, 季刊『ユーラシア』(新時代社・昭和47)第5号以下所収「アムール河流域民族誌」を参照。